

若者／世代間と通してみる琉球文化圏の認識 —奄美群島の島々と沖縄—

近藤功行（沖縄キリスト教学院大学・同大学院）

はじめに

下り便は、鹿児島新港を18時に、上り便は、那覇港を朝7時に出向する沖縄～鹿児島航路の定期船舶は、1986年8月筆者が初めて乗船した時、船上の看板に「沖縄～奄美群島経由～鹿児島」記載の記憶がある（＝郵送にて、船会社に確認中）。2021年7月現在、インターネットでは、「奄美各島」／「奄美諸島」の記載になっている（＝本抄録では、「奄美群島」を用いる）。沖縄県の人々にとって、奄美群島は、どう経験また認識されているのであろうか、そこに迫ってみる。

結果及び考察

〔1〕与論町と国頭村による海上集会：2012年5月15日、沖縄県は本土復帰40周年を迎えたが、これを記念する海上集会が43年ぶりにかつての国境より少し緯度を違えて行われた。海上集会は、1963年～69年に毎年行われていた。この時、集会の間近を通ることになっていたフェリーなみのうえ(6586ト)は、両町からの漁船25隻に乗った約100人の周りで汽笛を鳴らしながら周回し与論に約15分遅れで入港する。この内容について、当時、大学に入ったばかりの新入生からの意見を得る一方で、同時に定年間近な男性からの感想が脳裏に焼き付いている。その言葉とは、何だったのか。〔2〕若者のとらえ方：全員が沖縄県出身者であるが、(1)卒論ゼミ卒業生、(2)卒論ゼミ生から奄美群島に関連する「経験」と「認識」にあたる内容を聞き取った(2021年7月期)。経験では、(01)訪問の有無、(02)親類／親戚の有無、(03)授業で習った経験、(04)「奄美群島」と沖縄のつながりについて調べた経験、次に認識では、(05)～(13)で知っている島名、「琉球文化圏」の認識などを聞き取った。

前述の〔1〕で登場する男性は、当時、定年が近い男性管理職からであった。若者が見る奄美群島の認識、ここを以前から着眼しているため、まず沖縄の現状を紹介することとなる。また、高校まで沖縄で育ち、現在は鹿児島で暮らす研究職のある男性からは、「私の同級生は、奄美は鹿児島なので琉球文化圏とは思っていないです。奄美の方からは沖縄を兄弟島とか言っていますが、沖縄は無関心。専門家でない一般の人は、それぞれに対する思いがどうなのか。」（鹿児島本土側在住・50歳代）の声がある。加えて、奄美群島内で暮らす群島内移住のあう男性からは、「沖縄に住む方々の奄美認識ということでは、沖縄出身者とそれ以外とは違いはどうだろうかと思いました（学生さんは沖縄出身の方が多いのでしょうか）。沖縄の若い方々が、奄美を知らないこと、（中略）すべき仕事は沖縄にもあるなあと思うところです（日本は沖縄県民と本土人で構成されているという）（中略）要は沖縄の若い方々に日本がウチナーンチュとヤマトンチュだけで構成されているのではないということを知ってもらえたらいいと思います。」とある。琉球文化圏と奄美群島をどうとらえるのか。「ちなみに沖永良部島と与論は兄弟島と呼ばれています（北山王のハニジの二番目孫が、また沖永良部島三番目孫が与論を統治したということから。」（与論島・60歳代・女性）。奄美群島の島々から沖縄を見た時、与論島から沖縄は「親島」になるが、他の島のことを考えると、「兄弟島」と「親島」この双方を入れた方がよいことになる。さて、沖縄に住む人々、とりわけ現在の若者にとって、果たして奄美群島は、兄弟島なのだろうか。